

通い、路

ジン太

兄ちゃんは俺よりも3つ年上で、今では俺と同じ年だ。

この夏になる前に、お母さんは兄ちゃんの服を全部捨てた。段ボールにつめて、押し入れの奥にずっと入れていたものだ。

兄ちゃんが死んでからはお下がりを着ることはなくなった。けれど中学校に入学してすぐのころは、兄ちゃんの制服を着ていた。でも中学2年になったときに、兄ちゃんよりも大きくなってしまったので、兄ちゃんの制服も着られなくなった。

そういえば、あの制服どうしたの、とお母さんに聞くと、「捨てたの」。とそっけない返事。そのときはじめて、兄ちゃんの服は全部捨てられたことを知ったのだ。

何で捨てたの。そう言おうとして、言葉を飲み込んだ。

「そうなんだ、捨てたんだ」。そして、それだけ。

兄ちゃんのことを考えない日はなかった。これからもずっとこの気持ちを抱えているんだと思っていた。

でも、兄ちゃんのことを考える時間はだんだん少なくなっていった。毎日、友達とのおしゃべりと、部活の練習と、学校の勉強の日々。お母さんもお父さんも、前と同じか、それ以上に仕事をばりばりこなしている。生きているということは、とにかく忙しい。

俺は兄ちゃんのお墓参りに出かけた。

真夏の太陽がお墓を照らしていて、兄ちゃんはその中で暑いだろうなあ。ああ、でも兄ちゃんはまだ骨になってるし、そんなこと感じないんだ。俺は少し苦笑する。

夏の日差しで思い出す。兄ちゃんがまだ生きていて、俺がまだ小さかったころ。一緒にサマーキャンプに行ったことを。そういえば、あれからキャンプに行っていない。約束は、叶えられないまま俺の中にある。

お墓の周りの落ち葉を拾って、はえかけの雑草を抜いて、ペットボトルをひっくり返してお墓に水をかけた。そうして手を合わせた。

ふと、墓前になにか供えられているのに気付く。百円玉。ぴかぴか光っていた。

「ああ、友達が来たんだね。兄ちゃん」

夏樹先輩だ。憶えてくれたんだ。亮介先輩と来たのかな。二人、同じ高校に入ったって言ってたけど。相変わらず仲いいんだ。あの二人。高校に入学したって報告に来てくれてから、ずっと会っていない。

あの人たちが元気でいてくれて、兄ちゃんのことを憶えてくれている。そのことに少し救われた。

夕食のとき、お母さんとお父さんに、兄ちゃんの墓参りに行ったことと、夏樹先輩がお墓参りに来てくれたことを報告した。

「そう。憶えてくれてるのね」

お母さんはそう言った。

お父さんは俺にビールを勧めて、お母さんに怒られた。

「いいじゃないか。供養だ」

なにがいいのかわからないけれど、ほんの一口だけ俺も飲んだ。苦い味がした。

その夜、俺は夢を見た。

俺は山の中にいる。あかるい森の中を道歩いている。山の風と、木漏れ日と、ひぐらしの鳴き声が俺の肌に張り付く。それがくすぐったくて、気持ちよかった。ずっと向こうまで歩いていける気がした。

——どこまでいくの？

優しい声が、俺に語りかけてくる。

——どこまでも、どこまでも行こうよ。

俺は顔を上げて応える。眩しくて顔が見えない。

——うん。どこまでも、どこまでも行こうね。

そこにいるのは、今の俺と同じ顔をした——兄ちゃんだ。

「兄ちゃん！ 兄ちゃん！！」

はっと目を覚ますと、いつもと同じ自分の部屋だった。涙が頬を流れていることに気付く。
.....夢か。

部屋を、ゆっくりと見回した。カーテンの向こう側から、白み始めた空の光が透けていた。
今年も兄ちゃんがない夏がやってきた。

兄ちゃんはいつまでも14才のままで、俺だけどんどん大人になる。

「ずっと兄ちゃんに会いたかった」

俺は目をつぶる。

でも、もう会えないんだね。

森の中で、ぼくと兄ちゃんは歩いている。

兄ちゃんは14才で、ぼくは11才だ。

木漏れ日の中を、兄ちゃんとぼくは歩いて行く。ずうっと、ずうっと……。